



草刈りを始める前に並んで写真を撮らせてもらった。「精一杯の作り笑顔を！」といったら、本当の笑顔で返してくれた。

特集

山に入って 森から学ぶ

東京・檜原村で 森林ボランティアを体験

東京都にも村がある。
西多摩郡檜原村は、人口3000人あまりの小さな村だ。村の中央を標高1000メートル級の尾根が東西に走り、その面積の9割以上を山林が占める。ここの山々を舞台に、数多くの森林ボランティアグループが活躍している。そのなかに、20代の青年たちが中心となって活動しているグループ、「遊学の道プロジェクト」(YMP)がある。その作業に同行した。(編集部)



山に入る準備

地球温暖化の影響なのか、晩秋の山奥だというのに暖かい。今日は25度を越えるという。とはいえ、山の中は寒かるう。いや、山道を歩いて作業をしていたら暑くなるかもしれない。服装をどうするか悩んだが、YMPの人びとを見ると、本格的な作業服を着ている人から普段着の人までさまざま。足回りは地下足袋の人が多い。

「これが安くて扱いがいいんですよ。そう言うのは会社員の田辺さんだ。YMPでは会報を担当している。近くの靴屋で買ったという足袋を丁寧に履いている。」

林業家の田中惣次さんの持つ山にこれから入る。田中さんが経営するコテージに荷物を置き、準備体操をする。この担当は柔道整復士を目指して専門学校に通う今泉君だ。

YMPの代表を務めるOL、石山恵子さんが今日の作業の説明をする。

「今日は下草刈りを行います。来年の春に生えてくるカタクリのために、いま生えている草を刈りますので、なるべく低く、全部刈ってください。」

普段の参加メンバーは10人前後。石山

さんの説明を泰然として聞いている初老の男性がいる。本格的な服装だ。横浜から参加したという菅野さんを初めて見たとき、この人は絶対に玄人筋の人だ、と思った。林業家の方が指導に来ているのかもしれない。

「いやあ、横浜でメーカーの監査役をしています。何かお役に立つことがあるかなと思って、汗を流すのも好きなものだから。年々66歳です。ここは若いんだよね、平均年齢が20代でしょう。夜は話題についていくのが大変だね(笑)」

今日の下草刈りに使う鎌を研ぐ。手を切らないように、刃の固定の仕方と研ぎ方を習う。砥石がけっこう重い。時おりバケツの水をつけながら、念入りに研ぐ。鎌は柄が1.5メートルほどあるが、刃は思ったより小さく、30センチほどしかない。死神が持っているものももっと大きいのに。そう言うとき、「あれはヨーロッパなどで使われる牧草用の鎌。日本の山では大きすぎて使えませんよ」と言われる。なるほど。

吊り橋を渡って山へ

出発だ。少し国道を歩く。麦藁帽子をかぶって鎌を持った若い人びとの姿を見るのは初めてかもしれない。

1960年の檜原村では労働人口の過半数の人々が農業・林業で働いていた。それがいまわずか5%あまり。二桁しかない。

松本さんは、東京都森林組合につとめる24歳の男性だ。初参加だという。

「今はこの近くにある、森林組合の宿舎に住んでいるんですよ。」

もともと山登りが好きで、山で働ける仕事を探していた。

「林業は、これから必要になってくる仕事だと思っんです。環境問題がありますから。それに、面白い仕事ですよ。都会よりはましですね(笑)」

民家の脇を通りすぎ、川べりに出る。南秋川だ。高さ5メートルほどの吊り橋をわたると、本格的な山道となる。道幅は50センチほどだ。3分ほど歩くと小さな沢があり、「遊学の森入り口」と書かれた立て看板が立っている。

林業家の田中惣次さんと言う。

「遊学の道プロジェクトは面白い取り組みですよ。これは、言うならばボランティアのためのボランティアなんです。つまり、ボランティアに来る人びとが山に入ることができるよう、山に道を作っているんです。」

YMPが出発したのは98年のことだ。当時、東京農大の学生だった佐々木紀之さんが呼びかけて発足させた。佐々木さんは言う。

「東京の『青年の家』の活動に参加しているとき、田中惣次さんにお会いしたんです。山に道を作りたいという話を聞いて、ちょうどサークルを辞めて何かしたいと思っていたときだったので、田中さんに電話して、道を作りたいですかと聞いたら、ああいいよって(笑)」

沢を渡り、急斜面を横切る形で少しずつ高度を上げていく。天気はいいのだ